

数値の評価について② ～1次近似から級数表示まで～

吉田 信夫

大字への数字 10年2月号 掲載

先月号に続き、以下の発想で数値評価を考える。

- I) 式変形などの工夫(根性?)による評価
- II) 多項式による評価
- III) その数値に収束する数列による評価

$$\int_{a-x}^{a+x} f(t) dt = \frac{1}{a} \{ (a+x) - (a-x) \} = \frac{2x}{a}$$

である。右辺は、台形の面積公式から、

$$\int_{a-x}^{a+x} g(t) dt = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{a+x} + \frac{1}{a-x} \right) 2x = x \left(\frac{1}{a+x} + \frac{1}{a-x} \right)$$

である。よって、

$$\frac{2x}{a} < \int_{a-x}^{a+x} \frac{1}{t} dt < x \left(\frac{1}{a+x} + \frac{1}{a-x} \right)$$

が成り立つ。これで題意は示された。

(2) $\int_1^2 \frac{1}{t} dt = [\log t]_1^2 = \log 2$

を利用する。近似の精度を上げるために、2つに分ける。

(1) に $a = \frac{5}{4}, x = \frac{1}{4}$ と

$a = \frac{7}{4}, x = \frac{1}{4}$ を代入したものを：

$$\frac{1}{2} \cdot \frac{4}{5} < \int_1^{\frac{3}{2}} \frac{1}{t} dt < \frac{1}{4} \left(1 + \frac{2}{3} \right)$$

$$\frac{1}{2} \cdot \frac{4}{7} < \int_{\frac{3}{2}}^2 \frac{1}{t} dt < \frac{1}{4} \left(\frac{2}{3} + \frac{1}{2} \right)$$

を加える(右図参照)と、

(左辺) $= \frac{1}{2} \left(\frac{4}{5} + \frac{4}{7} \right) = \frac{24}{35} <$
 $= 0.685 \dots \dots$

(中辺) $= \int_1^{\frac{3}{2}} \frac{1}{t} dt + \int_{\frac{3}{2}}^2 \frac{1}{t} dt$
 $= \int_1^2 \frac{1}{t} dt = [\log t]_1^2$
 $= \log 2$

(右辺) $= \frac{1}{4} \left(1 + \frac{2 \cdot 2}{3} + \frac{1}{2} \right)$
 $= \frac{17}{24} = 0.708 \dots \dots$

となり、題意は示された。

*

*

$\log 2 = 0.693147 \dots \dots$ なので、良い評価である。

このように、面積を利用して図形的に数値評価する方法がある。前回挙げた問題を再掲しよう：

問題 5. 以下の問いに答えよ。

- (1) $0 < x < a$ を満たす実数 x, a に対し、次を示せ。

$$\frac{2x}{a} < \int_{a-x}^{a+x} \frac{1}{t} dt < x \left(\frac{1}{a+x} + \frac{1}{a-x} \right)$$

- (2) (1) を利用して、次を示せ。

$$0.68 < \log 2 < 0.71$$

ただし、 $\log 2$ は 2 の自然対数を表す。

(2007年東大第6問)

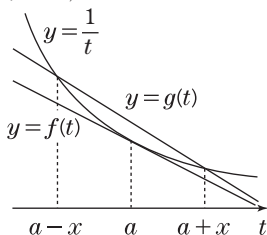
面積評価を利用した数値評価である。(2)では、(1)の x, a に何を代入するかを考えるが、工夫なしではうまくいかない。近似精度を上げる方法を考えよう。

解 (1) $y = \frac{1}{t} (t > 0)$ とすると、

$$y' = -\frac{1}{t^2} < 0,$$

$$y'' = \frac{2}{t^3} > 0$$

より、 $y = \frac{1}{t} (t > 0)$ のグラフ C は下に凸である。



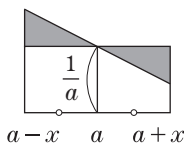
よって、 $\left(a, \frac{1}{a} \right)$ における C の接線を $y = f(t)$ とし、

C 上の2点 $\left(a+x, \frac{1}{a+x} \right), \left(a-x, \frac{1}{a-x} \right)$ を結ぶ直線を $y = g(t)$ としたら、

$$f(t) \leq \frac{1}{t} \leq g(t) \quad (a-x \leq t \leq a+x)$$

$$\therefore \int_{a-x}^{a+x} f(t) dt < \int_{a-x}^{a+x} \frac{1}{t} dt < \int_{a-x}^{a+x} g(t) dt$$

が成り立つ。左辺は、図のように長方形に等積変形でき、



問題 4. 円周率が3.05より大きいことを証明せよ.
(2003年東大第6問)

解 4 $f(x) = \frac{1}{1+x^2}$ ($0 \leq x \leq 1$)

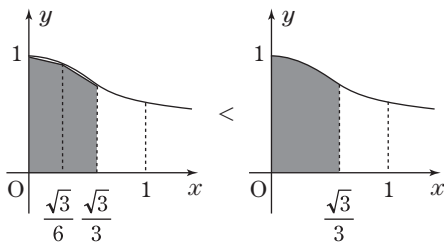
とおくと,

$$f'(x) = \frac{-2x}{(1+x^2)^2} = -2 \cdot \frac{x}{(1+x^2)^2} < 0,$$

$$f''(x) = -2 \cdot \frac{(1+x^2)^2 - x \cdot 4x(1+x^2)}{(1+x^2)^4} = \frac{2(3x^2-1)}{(1+x^2)^3}$$

x	0	...	$\frac{\sqrt{3}}{3}$...	1	$f\left(\frac{\sqrt{3}}{6}\right) = \frac{12}{13}$
$f'(x)$			-		-	
$f''(x)$			-	0	+	
$f(x)$	1		$\searrow \frac{3}{4}$		$\swarrow \frac{1}{2}$	

である。よって、図のように評価できる：



ここで、右の面積は、 $x = \tan\theta$ とおいて、

$$\int_0^{\frac{\sqrt{3}}{6}} \frac{dx}{1+x^2} = \int_0^{\frac{\pi}{6}} \frac{1}{1+\tan^2\theta} \cdot \frac{1}{\cos^2\theta} d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{6}} d\theta = \frac{\pi}{6}$$

である。左の面積は、台形2つの面積を足して、

$$\frac{1}{2} \left(1 + \frac{12}{13} \right) \cdot \frac{\sqrt{3}}{6} + \frac{1}{2} \left(\frac{12}{13} + \frac{4}{5} \right) \cdot \frac{\sqrt{3}}{6} = \frac{187\sqrt{3}}{6 \cdot 104}$$

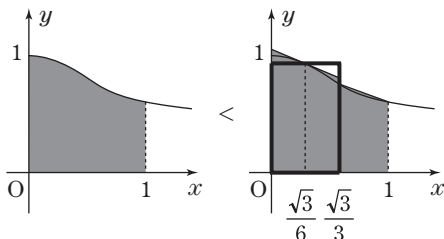
である。 $\sqrt{3} > 1.7$ であるから、

$$\frac{\pi}{6} > \frac{187\sqrt{3}}{6 \cdot 104}$$

$$\therefore \pi > \frac{187 \cdot 1.7}{104} = \frac{317.9}{104} = 3.0567 \dots$$

となり、これで示された。

注 上からの評価も可能である：



ここで、左の面積は、 $x = \tan\theta$ とおいて、

$$\int_0^1 \frac{dx}{1+x^2} = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \frac{1}{1+\tan^2\theta} \cdot \frac{1}{\cos^2\theta} d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{4}} d\theta = \frac{\pi}{4}$$

である。右の面積は、左側の台形を太線の長方形に等積変形して考えると、

$$\frac{12}{13} \cdot \frac{\sqrt{3}}{3} + \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} + \frac{3}{4} \right) \left(1 - \frac{\sqrt{3}}{3} \right) = \frac{5}{8} + \frac{31\sqrt{3}}{4 \cdot 78}$$

である。 $\sqrt{3} < 1.74$ であるから、

$$\frac{\pi}{4} < \frac{5}{8} + \frac{31\sqrt{3}}{4 \cdot 78}$$

$$\therefore \pi < \frac{5}{2} + \frac{31 \cdot 1.74}{78} = 2.5 + \frac{53.94}{78} = 3.1915 \dots$$

である。

* * *

これらに関連した“無限級数表記”を紹介する：

- 1) $\frac{\pi}{4} = 1 - \frac{1}{3} + \frac{1}{5} - \frac{1}{7} + \dots$
- 2) $\log 2 = 1 - \frac{1}{2} + \frac{1}{3} - \frac{1}{4} + \dots$
- 3) $e = \frac{1}{0!} + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots$ ($0! = 1$)

証明 1) 初項1, 公比 $-x^2$ の等比数列の和を考えて、

$$\sum_{k=1}^n (-x^2)^{k-1} = \frac{1 - (-x^2)^n}{1 + x^2}$$

$$\therefore \sum_{k=1}^n (-1)^{k-1} x^{2k-2} = \frac{1}{1+x^2} - \frac{(-1)^n x^{2n}}{1+x^2}$$

が成り立つ。この両辺を $0 \leq x \leq 1$ で積分して、

$$\sum_{k=1}^n (-1)^{k-1} \int_0^1 x^{2k-2} dx = \int_0^1 \frac{dx}{1+x^2} - (-1)^n \int_0^1 \frac{x^{2n}}{1+x^2} dx$$

である。計算すると、

$$\int_0^1 \frac{dx}{1+x^2} = \frac{\pi}{4} \quad (\text{先ほどの計算より})$$

$$(-1)^{k-1} \int_0^1 x^{2k-2} dx = (-1)^{k-1} \left[\frac{x^{2k-1}}{2k-1} \right]_0^1 = \frac{(-1)^{k-1}}{2k-1}$$

$$\therefore \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^{k-1}}{2k-1} = \frac{\pi}{4} - (-1)^n \int_0^1 \frac{x^{2n}}{1+x^2} dx$$

となる。ここで、

$$0 < \frac{1}{1+x^2} \leq 1 \quad (0 \leq x \leq 1)$$

$$\therefore 0 < \int_0^1 \frac{x^{2n}}{1+x^2} dx \leq \int_0^1 x^{2n} dx$$

であり、

$$\int_0^1 x^{2n} dx = \left[\frac{x^{2n+1}}{2n+1} \right]_0^1 = \frac{1}{2n+1}$$

集中講義～数値の評価～

$$\therefore \lim_{n \rightarrow \infty} \int_0^1 x^{2n} dx = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{2n+1} = 0$$

であるから、はさみうちの原理により、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_0^1 \frac{x^{2n}}{1+x^2} dx = 0$$

である。よって、

$$\frac{\pi}{4} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^{k-1}}{2k-1} = 1 - \frac{1}{3} + \frac{1}{5} - \frac{1}{7} + \dots$$

が成り立つ。

$$2) \quad \sum_{k=1}^n (-x)^{k-1} = \frac{1 - (-x)^n}{1+x} \quad (0 \leq x \leq 1)$$

を積分する。以降は1)とはほぼ同様なので、省略。

$$3) \quad I_0 = \int_0^1 e^{-x} dx, \quad I_n = \frac{1}{n!} \int_0^1 e^{-x} x^n dx$$

とおくと、

$$I_0 = [-e^{-x}]_0^1 = 1 - \frac{1}{e},$$

$$\begin{aligned} I_{n+1} &= \frac{1}{(n+1)!} \int_0^1 (-e^{-x}) x^{n+1} dx \\ &= \frac{1}{(n+1)!} [-e^{-x} x^{n+1}]_0^1 + \frac{1}{(n+1)!} \int_0^1 e^{-x} (n+1)x^n dx \\ &= \frac{1}{n!} \int_0^1 e^{-x} x^n dx - \frac{1}{e} \cdot \frac{1}{(n+1)!} \\ &= I_n - \frac{1}{e} \cdot \frac{1}{(n+1)!} \quad (n \geq 0) \end{aligned}$$

となる。階差数列の公式から、 $n \geq 1$ のとき、

$$\begin{aligned} I_n &= I_0 + \sum_{m=0}^{n-1} \left(-\frac{1}{e} \cdot \frac{1}{(m+1)!} \right) \\ &= 1 - \frac{1}{e} - \frac{1}{e} \sum_{m=0}^{n-1} \frac{1}{(m+1)!} \\ &= \frac{1}{e} \left(e - \sum_{k=0}^n \frac{1}{k!} \right) \end{aligned}$$

である。ここで、

$$0 < e^{-x} \leq 1 \quad (0 \leq x \leq 1)$$

$$\therefore 0 \leq I_n \leq \frac{1}{n!} \int_0^1 x^n dx$$

であり、

$$\frac{1}{n!} \int_0^1 x^n dx = \frac{1}{n!} \left[\frac{x^{n+1}}{n+1} \right]_0^1 = \frac{1}{(n+1)!}$$

$$\therefore \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n!} \int_0^1 x^n dx = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{(n+1)!} = 0$$

であるから、はさみうちの原理により、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} I_n = 0 \quad \therefore \lim_{n \rightarrow \infty} \left(e - \sum_{k=0}^n \frac{1}{k!} \right) = 0$$

である。よって、

$$e = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{k!} = \frac{1}{0!} + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \frac{1}{4!} + \dots$$

が成り立つ。

*

*

無限級数表示のうち、1), 2) は正負の項が交互に現れるため収束速度が遅い。一方で、3) の収束速度は e の定義:

$e = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 + \frac{1}{n} \right)^n$ よりもずっと速い。

n	1	5	10	∞
$\sum_{k=1}^n \frac{(-1)^{k-1}}{2k-1}$	1.000	0.835	0.760	$\frac{\pi}{4} = 0.785$
$\sum_{k=1}^n \frac{(-1)^{k-1}}{k}$	1.000	0.783	0.646	$\log 2 = 0.693$
$\sum_{k=0}^n \frac{1}{k!}$	2.000	2.717	2.718	$e = 2.718$
$\left(1 + \frac{1}{n} \right)^n$	2.000	2.488	2.594	$e = 2.718$

(小数第4位を四捨五入)

*

*

最後に、2007年東大総合科目Ⅱ第1問をもとにした問題を通じて、近似の定番『ニュートン法』を見ておこう。

問題 6. $\alpha = 10^{\frac{1}{7}}$ の近似

値を次の方法で求める:

$f(x) = x^7 - 10$ とし、

$y = f(x)$ のグラフを C

とする。 $x_1 = 1.5$ とし、

$(x_n, f(x_n))$ における C

の接線と x 軸の交点の x 座標を x_{n+1} とする。

(1) $x > 0$ で常に $f''(x) > 0$ となることを示せ。

また、 $x_n > \alpha$ であることを示せ。

(2) x_{n+1} を x_n で表せ。

(3) α の近似値 x_n の誤差を $\varepsilon_n = x_n - \alpha$ と定義

するとき、 n によらない正の定数 M を用いて

$\varepsilon_{n+1} < M\varepsilon_n^2$ の関係が満たされることを示せ。

ここで、(2) で得た x_n と x_{n+1} の関係式を

$x_{n+1} = g(x_n)$ と表す。このとき、 $g(x)$ は $\alpha < x$

のとき、 $\alpha < b < x$ の範囲にある b によって

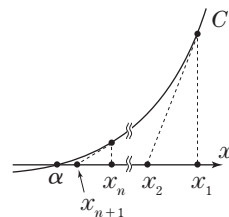
$$g(x) = g(\alpha) + g'(\alpha)(x - \alpha) + \frac{g''(b)}{2}(x - \alpha)^2$$

と表されることを用いてもよい。

(4) x_2 を α の近似値とすると、誤差 ε_2 は

0.05 未満であることを示せ。ただし、必要なら

ば $\alpha > 1.35$ を用いてよい。



集中講義～数値の評価～

解 (1) 2回微分して,
 $f'(x) = 7x^6, f''(x) = 42x^5 > 0 (x > 0)$

より, 前半は示せた. 引き続き後半を示す.

$$f(\alpha) = 0, f(x_1) = \left(\frac{3}{2}\right)^7 - 10 = \frac{2187}{128} - 10 > 0$$

であり, $f(x)$ は増加関数であるから, $x_1 > \alpha$ である. つまり, $n=1$ では成り立つ.

$n=k$ で $x_k > \alpha$ であるとする. $x > 0$ で C が下に凸より, $(x_k, f(x_k))$ における C の接線は, $x > 0$ において C よりも下にある. ゆえに,

$$[x_k > \alpha \text{ ならば } x_{k+1} > \alpha (k \geq 1)]$$

が成り立つ (前頁の図を参照).

数学的帰納法により, 常に $x_n > \alpha$ である.

(2) $(x_n, f(x_n))$ における C の接線は

$$y = 7x_n^6 x - 6x_n^7 - 10$$

である. $y=0$ として, 求める関係式は以下の通り:

$$x_{n+1} = \frac{6}{7} x_n + \frac{10}{7x_n^6}$$

(3) ヒントの式から, 各 n で

$$g(x_n) = g(\alpha) + g'(\alpha)(x_n - \alpha) + \frac{g''(b_n)}{2}(x_n - \alpha)^2 \dots\dots\dots (*)$$

となる $b_n (\alpha < b_n < x_n)$ が存在する. (2) より,

$$g(x) = \frac{6}{7}x + \frac{10}{7x^6} (x_{n+1} = g(x_n)),$$

$$g'(x) = \frac{6}{7} - \frac{60}{7x^7}, g''(x) = \frac{60}{x^8}$$

であり, $\alpha^7 = 10$ から,

$$g(\alpha) = \frac{6}{7}\alpha + \frac{10}{7\alpha^6} = \alpha, g'(\alpha) = \frac{6}{7} - \frac{60}{7\alpha^7} = 0$$

である. これを (*) に代入すると,

$$x_{n+1} - \alpha = \frac{g''(b_n)}{2}(x_n - \alpha)^2$$

が成り立つ. $g''(x)$ が単調減少であるから,

$$g''(b_n) < g''(\alpha) = \frac{60}{\alpha^8} = \frac{6}{\alpha} (\because \alpha^7 = 10)$$

が成り立ち, $M = \frac{g''(\alpha)}{2} = \frac{3}{\alpha}$ とおけば,

$$x_{n+1} - \alpha < M(x_n - \alpha)^2 \therefore \varepsilon_{n+1} < M\varepsilon_n^2$$

となる.

(4) (3) より,

$$0 < \varepsilon_2 < M\varepsilon_1^2 = \frac{3}{\alpha}(1.5 - \alpha)^2$$

$$< \frac{3}{1.35}(1.5 - 1.35)^2 = 0.05$$

が成り立つ.

*

*

$$x_2 = \frac{6}{7} \cdot \frac{3}{2} + \frac{10}{7} \cdot \left(\frac{2}{3}\right)^6 = \frac{7201}{5103} = 1.411\dots\dots\dots,$$

$$\alpha = 1.42857\dots\dots\dots$$

なので, 良い近似である.

この近似法をニュートン法というが, $\varepsilon_{n+1} < M\varepsilon_n^2$ であるから, 収束速度が非常に速い. この評価では,

$g(x)$ を 2 回微分可能な関数とする. $\alpha < x$ のとき, $\alpha < b < x$ の範囲にある b によって

$$g(x) = g(\alpha) + g'(\alpha)(x - \alpha) + \frac{g''(b)}{2}(x - \alpha)^2$$

と表される.

が鍵であった. 抽象的になるが, これを証明しておく.

証明 $h(x) = g(x) - g(\alpha) - g'(\alpha)(x - \alpha)$

とおくと,

$$h'(x) = g'(x) - g'(\alpha),$$

$$h(\alpha) = h'(\alpha) = 0$$

$$h''(x) = g''(x)$$

である. x を固定したとき, $\alpha < t < x$ を定義域として

$$p(t) = (x - \alpha)^2 h(t) - h(x)(t - \alpha)^2$$

とおくと,

$$p(x) = p(\alpha) = 0,$$

$$p'(t) = (x - \alpha)^2 h'(t) - 2h(x)(t - \alpha)$$

である. 平均値の定理より,

$$\frac{p(x) - p(\alpha)}{x - \alpha} = p'(c)$$

となる $c (\alpha < c < x)$ が存在し, $p(x) - p(\alpha) = 0$ なので,

$$p'(c) = 0$$

$$\therefore (x - \alpha)^2 h'(c) - 2h(x)(c - \alpha) = 0$$

$$\therefore \frac{h(x)}{(x - \alpha)^2} = \frac{h'(c)}{2(c - \alpha)} \dots\dots\dots (*)$$

が成り立つ. 再び平均値の定理から,

$$\frac{h'(c) - h'(\alpha)}{c - \alpha} = h''(b) \left(\Leftrightarrow \frac{h'(c)}{c - \alpha} = g''(b) \right)$$

となる $b (\alpha < b < c)$ が存在する. (*) に代入して,

$$h(x) = \frac{h'(c)}{2(c - \alpha)}(x - \alpha)^2 = \frac{g''(b)}{2}(x - \alpha)^2$$

$$\therefore g(x) = g(\alpha) + g'(\alpha)(x - \alpha) + \frac{g''(b)}{2}(x - \alpha)^2$$

である. 以上で示された.